

INTERVIEW

奈良市立都祁診療所 所長
西村正大先生



地域医療を良くするために できること。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

小児も大人も診たい

山田隆司(聞き手) 今日には奈良県の奈良市立都祁診療所に西村正大先生を訪問しました。先生は協会の研修修了生として若手医師の中核となっており、地域医療振興協会の仕事をしてくださっているため、ぜひ先生のお話を伺いたいと思っていました。まずは先生の経歴を紹介していただけますか。

西村正大 私は平成17年に大阪大学を卒業し、新医師臨床研修制度が始まった2年目だったのですが、初期研修は大学のプログラムに入り、1年目は大阪大学医学部附属病院、2年目は当時の市立泉佐野病院(現りんくう総合医療センター)に行きました。もともと町医者を目指して医師を志したのですが、大学ではそういう道は

見えてこなかったため、当時は小児科を考えていました。

市立泉佐野病院は年間6千台くらい救急車を受け入れる救急病院で、主に研修医がERを担当していましたが、来る人来る人に対してとにかく対応するという仕事に非常にやりがいを感じました。小児科のローテーションもしたのですが、中に入ると大人が別世界のように、それではやはりもったいないと思い、小児も大人も、内科も外傷も診られる医師になりたいと考えて後期研修を探しました。当時は(インターネットと)後期研修プログラムが整いつつあった時期で、たまたま「総合診療研修」というキーワードで検索したら、協会の市立奈良病院プログラ

ムが出てきたのです。そこで見学に行った際の武田以知郎先生(現 明日香村国保診療所所長)の外来がすごく印象的だったんですね。高血圧で定期受診している人が「腰が痛い」と言い出したのです。すると武田先生はおもむろに背中を触って「レントゲンを撮りましょう」と撮ったのです。撮って何かが分かったわけではないのですが、そこでちゃんと対応したということが私にとってはかなり画期的で、こういう仕事をしていいんだと思ったのを今でも覚えています。それで迷いはなく、協会の家庭医療プログラム「地域医療のススメ」に入りました。総合診療18ヵ月、消化器内科6ヵ月、整形外科3ヵ月、小児科3ヵ月のローテーションをして、最後の半年、東通地域医療センターへ行き研修を修了しました。

山田 後期研修修了後は京都の洛和会音羽病院へ行かれたのでしたね。どうして音羽病院を選んだのですか。

西村 総合診療を続ける上で、アカデミックな部分の力不足を感じていたからです。音羽病院は全国的に有名な研修病院ですから、一から鍛え直す気持ちで行きました。ただ、東通村に行く前に決めてしまっていたのです。もし、決めてなければ私はそのままへき地に残っていたかもしれません。それくらい、東通村で川原田 恒先生に教えていただいた地域医療は魅力的でした。短い期間でしたが、私の地域医療の原点だと思っています。

山田 なるほど。それが今につながっているのです

ね。では、音羽病院ではどのようなことを学んだのですか？

西村 その分野で一流の尊敬する上司と指導医に恵まれ、ハイレベルな内科学と診断学を教えてくださいました。全国から集まってくる同期や先輩も優秀な人ばかりで、揉まれながら必死で勉強しました。辛い時期もありましたが、今では貴重な財産になってます。

山田 音羽病院には何年間いらっしゃったのですか。

西村 3年間です。実は、途中から系列の天津ファミリークリニックという在宅中心の診療所にも行っていました。というのも、音羽病院でもご高齢の患者さんは多く、本当に弱った超高齢の患者さんに疾患中心の方法論だけで対応してもうまくいかない場面を多く経験しました。その当時、診療所を経験したことがあるスタッフが少なかったこともあって私が生物心理社会的な視点を提供すると皆さんが意外に興味をもって聞いてくれるのです。それで自分は家庭医療系の人みたいになってきて……。私としてはバランスが大事だと思っているだけでどちらでもいいのですが、逆に、この時期に家庭医としてのアイデンティティが形成されたとも言えます。

山田 確かに診断学の視点で高齢者を診ると、たまたま病気が見つかったり、あまり予後に影響しない疾病や障害に引っ張られてしまって、バランスの悪い医療の迷路に入り込んでしまうことも珍しくないですね。そんな病院のなかでも先生は家庭医的な診療をしていたということですね。

地域では求められる医療を素直に実践できる自由がある

山田 それで音羽病院の3年目のころに市立奈良病院から声がかかったのです。どうして奈良病

院に戻ろうと思ったのですか。

西村 音羽病院は修行だと思って行ったところがあ